

稲實 愛子

INAMI, Aiko

熱帯地方のバナナ繊維を活用した子供向け玩具のデザインに関する研究

Research on the design of toys for children, utilizing banana fiber from the tropics

はじめに

私は大学2年生の時初めてバナナ繊維に出会った。生産デザイン学科テキスタイルデザイン専攻のバナナ・テキスタイル・プロジェクトで関連授業が開講されたため、熱帯地方でバナナの収穫後に廃棄されたバナナ繊維が紙類・紡績・ボードなどに再活用できることを学んだのだ。デザインの力でこれまで廃材であったものが新しい価値あるものに展開していくことに魅力と感銘を受け、バナナ繊維に将来への可能性を感じた。しかし従来の研究では繊維を日常生活用品に展開する取り組みはあるが、子供たちに遊びの中に学びを伝える教育的価値としても広く展開できるという指摘がない。

従って本研究ではバナナ生産国のバナナ農園で果実の収穫後に廃棄されたバナナの偽茎から抽出した繊維を活用したプロダクトデザインを行うにあたり、熱帯地方の子供のためと日本国内の子供たちに現状を知ってもらうきっかけとなる玩具の提案を目的としたプロダクト制作を行う。

研究の対象

本研究の対象はバナナ繊維のボードと玩具のデザイン、遊びから得る子供の発達、国際支援の展開である。

研究方法と結果

文献調査では、環境問題に関わる書籍や国内でのバナナ以外の廃棄素材でボードとして利用されているものについて、バナナ繊維の活用において類似しているものがあるか、また、玩具や子供の発達について調査し、それに伴う玩具製品がどのように展開されているかを調査した結果、バナナ繊維の活用事例にバナナ生産国であるブラジルのリオ・デ・ジャネイロでバナナ繊維を活用したボードが展開されていることを学んだ。バナナ生産国の住民ではない私がデザインを通してできる繊維の活用方法は何かと改めて考えるきっかけになり、そのためのデザインを考え開発し将来的に企業とも提携していきたいと強く感じた。フィールドワークではエチオピアでエンセーテの研究をされているプロジェクトに参加し、素材が製品に向かうシステムや地元住民とのコミュニケーションの取り方などを学んだ。また、多摩美術大学のラオスプロジェ

クトでも参加した村人たちへ物をデザインすることと完成度を上げるという点で、試行錯誤しながらも伝えることの重要性を学んだ。

プロダクトデザインでは世界の玩具や日本国内で作られている玩具を調査し見学なども行った。設定は室内で遊ぶもので、子供の手に納まる大きさと視覚や触覚で楽しめるものを重点的に調査し、バナナ繊維の玩具を想起した。それらを元に図1に示すワークショップでは小学生127名を対象に制作したプロダクトを用い、遊ばせてみた時の反応と感想を得るためのアンケート調査を実施し、教育普及を目的としたバナナ繊維の活用方法や現状などの説明を行い「ちくちくする」「そざいがおもしろい」「どうやってつくっているの?」「うってほしい」などの意見や感想の関心具合から、自身が行ってきた玩具提案への方向性は正しかったという確信を得た。また、玩具の歴史は古く、先史時代に大人が用いた宗教儀式や生活の様々な道具が子供に下げ与えられたことに始まると言われている。子供にとって遊びは生活行動であり、玩具は活動の方向性を生み出す文化と社会生活へ適応する為の訓練であり、現代でもそのような機能面の他に想像力や情緒を養う存在として活用される場面も増えたことを学んだ。中でも「手」から得る情報は非常に多く、脳の発達にも指先からの触覚が重要な役割を果たしているのも、そのことも活かし、図2と図3に示す組み立てた先にバナナができるという流れを栽培に見立て、遊びを通して廃棄されたバナナ繊維が活用されるところのような玩具にもなるという「活用」が学べるという教育的価値もある玩具を最終的に制作した。

おわりに

私が生活用品に展開していくことに現在は焦点をあてず子供向け玩具にあてた理由は、(1)日本におけるバナナの栽培が少なく、現段階では大量生産に不向きで小ロットや中量生産に向いていること。(2)「遊び」は人々の生活の身近にあり、子供の自己成長にも必要とされてきたこと、だからである。バナナ繊維の特性である触感、プロダクト製品に加工しやすい点、天然繊維であることを活かし遊びの中に「おもちゃ」として子供たちに知識や情報を伝えたい。新素材として触れた子

供や大人たちが、バナナ生産国で起きている現状を知るきっかけになり、廃棄物からも役立つものがデザインできるということを、「バナナ」を通して伝えたい。そして、これから成長していく子供たちに遊びながら学べるものを提供していくことが、次の世代に活かされていく『還元』になると想定し、それに関連したプロダクト制作をこれからも進めていきたい。



図1：子供たちにワークショップを実施



図2：Banana Heart（部分） バナナ繊維、熱接着繊維



図3：Banana Heart バナナ繊維、熱接着繊維

新田 桂子

NITTA, Keiko

プリントテキスタイルの抽象的な造形をモチーフとしたパターンデザイン

Study on print textile design with abstract forms as motif

パターンデザイン（柄や文様など、くりかえされる模様）という装飾造形は、あらゆるものの表層の美のために広く用いられ、私たちの精神的な豊かさに深く貢献している。建築物の壁面装飾や布の柄としてなど古くから活用されてきた歴史のある装飾であり、そのことは、いかに人間の心の奥底にパターンデザインという装飾への欲求が根付いているのかを示している。現代では、日々の生活の中で目にする機会が多くあるテキスタイルのパターンデザインが、人々にパターンデザイン装飾の魅力を伝えることのできる最も身近な存在であると私は思う。また、テキスタイルのなかでも、経糸と緯糸による制限のある織物のパターンデザインに比べて、表現の自由度が高いプリントテキスタイルのパターンデザインは、特にそうであると思う。

プリントテキスタイルは実用の場において決してフラットな形状を保つものではない。ゆえにその表層のデザインにおいては「描かれているものがなにか」ということに先立って、色や形・構成のリズム（くりかえしの仕方）の調和がもっとも大切だと私は考える。つまり、動物や植物など、わかりやすく具体的な意味をもったモチーフを用いることが人々に共感をもたらすデザインづくりにつながるのではなく、純粋な色や形のバランスによる調和がとれていることが、プリントテキスタイルのパターンデザインにおける質の高いデザインづくりにつながるのだと思う。パターンデザインという造形においてはこのことが達成されていることが、時代や好みを越えた次元でも人々の心理に共感と美的快楽をもたらすために大切なことであり、本質であると思う。ゆえに本研究は、色や形のバランスによる抽象造形をモチーフとしていることに焦点を当てた上で過去や現代の様々なパターンデザイン、さらに絵画などアートにおける抽象造形の作品をふくめて調査を行い、より本質的な意味で質が高く、自身と同じ時代を生きる人々の心に響くプリントテキスタイルのパターンデザイン制作を目的として行ったものである。

修了制作では「色彩による様々な効果」をテーマにデザインを展開することとした。色彩というものはもっとも人の心理に影響をあたえる造形要素であると私は考える。視覚効果によって人々の精神性への貢献を重視したテキスタイルデザ

イン制作を目指しているため、このテーマを設定した。この作品は素材としてのテキスタイルデザインの提案で「PALETTE PATTERN」というタイトルとする。PALETTE とは調色板という意味であり「色」をテーマにデザインされたこれらのテキスタイルから、鑑賞者がそれぞれ自分のパレットで色をつくってゆくように、自分なりの使い道や発展のさせ方を想像し、また実際に活用して楽しんでもらいたいという思いを込めた。ひとつずつのデザインについて述べると、作品写真（右頁上）の左から順に、色彩のリズムをテーマとした「MIRROR」、色彩のサイン的な性質をテーマとした「border」、色彩対比による空間性をテーマとした「cosmos」、色彩対比そのものをテーマとした「わたあめ」、配色替えによるイメージの大きな変化をテーマとした「KUNEKUNE」の5種類のデザインでひとつのシリーズとした。またこの作品は素材としてのテキスタイルデザインの提案であるため、実際に活用された例を実物として示すことが有効であると考え、ウェアの制作を依頼した（右頁下）。批評会ではシリーズ作品としてはテイストが散漫であることや、私の作品をウェアの素材として活用することが展開方法として良いという批評を受けたので、今後の参考にしたいと思う。

私にとっての装飾とは、「癒し」であり「コミュニケーションツール」である。パターンデザインという装飾造形には幼い頃から魅力を感じていた。市販のペットボトルラベルに小さく印刷された唐草文様のような縁飾りを眺めては、自分も真似をするように、くりかえし続いてゆく縁飾りのような絵を描いていた。今思えば、それは自分にしか分からない「しるし」のようなものをつける、という感覚に近いと感じる。自分でつくった装飾をなにかに施すことで、私は自身の存在を確かなものだと感じる事ができていたのかもしれない。一方で、装飾という言葉は「装い、飾る」という言葉から成り立っているが、「装う」、つまり服飾というものも日常で身近な装飾行為だと私は思う。自分の思い描くイメージの通りに自分自身を装飾したいという欲求は、少なからず多くの人がもつものだろう。このような、人が自分の心や感情と一体になるための「装飾」は、私にとっては「癒し」であると感じる。服飾だけでなく、インテリアなどの住環境の装飾も同様に感じる。また、自分を思い通りに装飾したいと願う目的には、時として、その装つ



Palette pattern

染料 / 綿布 / Dye on cotton

700 × 115 cm (5種類)

た姿を見せたいと思う他者の存在がある。このときの自己演出的な装飾は「他者とのコミュニケーションツール」としての装飾なのだと思う。

このように、装飾は「癒し」や「コミュニケーションツール」として人の心理に深く根差しているものであると思う。木々の葉が風で揺れるのを見ると心地よくなることや、好きな音楽を聴くと心地よくなるように、日常のあらゆるものから感じるいろいろな「心地よさ」と同様な癒しの感情を装飾によって人々に与えることができるということを、過去に実践されてきたさまざまな装飾についての調査を通して実感し、装飾の意義を感じた。「装飾」というものの潜在的な力を信じ、また自分の本能的な装飾への強い欲求を認め、それをかたちにすることを追求してゆくことで、他にはない現代の装飾のひとつの姿を明快に打ち出すことを今後も目指したい。



ウェアデザイン・制作 / 緒方 晋

野島 李香

NOJIMA, Rika

染色表現による他者の想像力を刺激する線に関する研究

A study of line as a means to stimulate the imagination of others through dyeing

はじめに

私はこれまで感覚的に描いた有機的な線の集まりにより人の想像力を喚起できるのではないかと考え染色表現による作品制作を行ってきた。記号としての役割を果たさない不完全な情報は、人の想像力を喚起できるのではないか。それはパウル・クレーの「芸術とは見えるものの再現ではなく見えるようにすることである。」¹という言葉に繋がるのではないかと考えている。私はこの言葉を、芸術作品とは説明的な理解をするための再現的な描写ではなく、制作者が見えているものを鑑賞者に見える形で表現する事であり、鑑賞者には見えていなかったものを提示、共有できるものであると解釈した。見えているものの「再現」に重きをおくのではなく、内実から生まれるものに重きをおくクレーの思想に深く共感をしている。私は内実とはその人の精神に深く関わる内的な世界だと考えている。このことから、想像力という人間の内実から生まれる行為を、染色表現による線を通して人為的に刺激したいと考え研究を行った。

修了作品

修了作品として3枚の布を染めた。《浸透》というタイトルは、鑑賞者に対して内実まで染み込んでいって欲しいという願いと、染色表現であることを主張するためである。

染色技法については友禅染めの筒描きを使用した。液体から個体へと流動的に変化する糊は、なめらかな曲線を染めるのに最適だからと考えたからだ。そして、輪郭ではない線で埋め尽くす事によって記号としての力が弱い「不完全な情報」をつくりあげ鑑賞者の想像力を喚起しようと試みた。線で埋め尽くすことで線に着目していることを強調した。さらに想像力の幅を広げるために、私に関わる日常の写真をモチーフとした。現実に近いことで鑑賞者が経験したかもしれない光景を作りたかったからであり、「私に見えている」光景を染める試みである。そして「身体性の営為の介在」²を感じさせるために、下書きの線をなぞるのではなくその時の感覚で糊の線を描いていく方法をとった。線を描いているとき私は自身が生きていることを強く感じさせられる。自分の動いた軌跡が線として布に定着していくからである。視覚的に解りやすく

自身の生を実感できるのだ。そこに喜びが生じるからこそ私は線に魅了され続けてきたのではないだろうか。そして作為的ではない感覚的に描く線は藤田嗣治の言う「直感から生まれた線」³に繋がるのではないだろうか。青を基調とした色彩の中で、染色の素材(布)の本質を大切にするため布の白さを生かすことを計画した。私は染料が布にしみ込んでいくさまに美しさを感じている。この数秒間の美しさを布に定着させたいと思う。

おわりに

染色表現による線のもつ可能性とはなにか、その一つとして想像力を喚起する可能性があるのではないかという考えから本研究は始まった。染色、想像力、線、色彩に関する文献及び作品を対象とし調査と考察、試作を行った。この研究を通して、想像力を喚起するためには鑑賞者の記憶という内側を刺激する必要性があり、染という内実に関わる表現との共通性を見いだすことができた。作品と向き合う中であらためてわかったことは、色彩だけでなく自身の感情を布に染み込ませようとしていることである。そして想像の中でも「なにかにみえる」という想像力に着目することで作品を通して鑑賞者に関わりを持つようとしていることである。さらに、線を染めているとき私は幸福を感じており、「身体性の営為の介在」により生み出される「生」の実感が、私をそうさせるのだと考えた。最後に、調査を経て青という色彩に思考を巡らせてきた人々に敬意を表するとともに、感覚のみで捉えていた色彩に対して本質を知ろうとアプローチすることができた。今後の課題としては、多くの人に鑑賞をしてもらい批評を得る必要性を感じている。この研究は鑑賞者の存在によって初めて成り立つからである。さらなる技術の向上、素材との関わりを考え染色表現による線の可能性をさらに深めていきたい。

1. 千足伸行、浅田彰、アートギャラリー現代世界の美術 13 クレー、集英社、p.21 (1985)

2. 李禹煥、余白の芸術、株式会社みすず書房、p.331 (2000 年)

3. 藤田嗣治、藤田嗣治画文集 猫の本、株式会社講談社、p.87 (2003)



浸透 / Infiltrate

友禅染め、酸性染料 / 絹 / Yuzen dyeing and acid color on silk

300 × 276 cm

森桶 五月

MORIOKE, Mei

テキスタイルに込められた願意の研究

吉祥文や死者を包む布から見る人々の想い

Study of wishes in textile

— Considering patterns and textiles for wrapping the deceased —

1. はじめに

なぜ人は家族や自分への思いを込めて布と向きあい、着る人を守るための文様を刺繍する、自身の願いを織物に重ねてきたのであろうか。

多摩美術大学美術学部生産デザイン学科テキスタイル専攻の卒業制作では、《Dear People of Today》というタペストリー作品を制作した。これは、忙しい毎日を送る現代人のために発展する都市の風景や豊作の田んぼ、キノコ等をモチーフに子孫繁栄や豊穡の願いを込めたタペストリーである。この制作をきっかけに、産業革命以後の目覚しい繊維産業の発展の中で大量生産され大量消費されるテキスタイルではなく、誰かが誰かの成長や幸福などを祈願して作ったエスニック・テキスタイルに関心を持つようになった。テキスタイルに刻まれた文様の成り立ちや、制作という行為自体に人間が込めた意味合いを考えながら自己の制作活動を探求したいと考えた。これまでに世界の様々な民族は特有のテキスタイルカルチャーを形成しており、テキスタイルに願意を込めた制作が日常的になされてきた。トロンプリアンドの女性用繊維状のスカートやサモアの贈答用の敷物、沖縄の芭蕉布、津軽のこぎん、アフリカの葬礼用ラフィア、インドネシアの絣織物などが挙げられる。

しかしこれらのテキスタイルはある特定の文化圏や民族のアイデンティティを表象するものとして捉えられるにすぎず、私が行っているようなテキスタイルをメディアとした個人的な制作活動とは異なる。従って本研究では、エスニック・テキスタイルに込められた願意に関する考察を踏まえ、現代社会に生きる私が特定の人物への願意をこめたテキスタイルを制作することにより現代社会における人の思いが込められたテキスタイルの在り方を探求したい。

2. 研究対象

研究対象は制作者が特定の人物に向けて文様に願意を込めたテキスタイル（子孫繁栄や多産、吉祥、魔除け等）と死者を包む布や婚礼時に使う布等の通過儀礼の際に譲渡や贈与、富と交換することでコミュニティを強化し、来世や婚姻生活を円滑にする願いが込められたテキスタイルとする。

3. 死者を包む布についての文献調査結果と考察

死者を包む布というテーマを元に、インドネシアの東スンバ島における、葬礼の際の布の利用方法に興味を持った。東スンバにおける布というモノを介したコミュニケーションについては、田中の『ものづくりの文化人類学』【2002】やアダムス〔1971a〕による布作りの工程に見られる象徴的な文様の分析などで取り上げられている。これらの研究では、布が作り出す人々の関係性（譲渡、売買、交換など）の社会的システムに焦点を当てており、本研究ではこれらの研究では取り上げられなかった、何故人が亡くなった際に布に遺体を包むのか、という根本的な問題について、紐といていきたいと思っている。

村で人が亡くなると、弔問客達は遺体に自身の持ち寄ったヒンギやラウ（ヒンギは男性用、ラウは女性用の絣の腰巻き）を掛ける為に喪家を訪問する。遺体は洗い清められ、ティアラという絣の頭巾を掛けられる¹。そして、遺体を十字に重ねたヒンギの上に、躊躇させた状態で鎮座させ布で包み、その上から、弔問客が持ち寄ったヒンギやラウを幾重にも掛けていく。ヒンギやラウを持ち寄る事は、故人に敬意を示す機会である。遺体を包み、棺に掛けられていく布の量は、故人の生前の交友関係や地位に比例する。一般的な村人の場合、腰布の枚数は死亡時の弔問で30枚近くである。しかし、ラジャ（村の権力者）の葬儀ともなると、その遺体は100～200枚以上の布で包まれ、埋葬儀礼（巨大な石棺に遺体を移す儀礼）当日でも同量の布が集まると言われる²。

上記に示した文章は、スンバ島での、葬礼を述べた文章である。ここで、私が注目したことは、腰布であるヒンギ、ラウをうず高く積み、遺体を包み込む葬礼スタイルである。山口は「儀礼的行為と言われるものの多くは、こうした原則を確認するために、原初の状態を再現する行為から成っている」と述べている³。このように死者のイニシエーションを調べる時、多くの文化圏で胎内帰還の図式を取る儀礼が多く存在する。例えば、死者が胎児の姿勢で埋葬される様な一例である。

死者をヒンギやラウで死者を包むという行為はエリアーデの言う「死の観念が新しい誕生をともしよう新しい妊娠観念に置きかわっている型。ここでは加入礼は主として胎生学的・婦人科学的用語で表現される⁴。」という分野の儀礼に分けら



始まり / The start

ロウケツ染め、ニードルパンチ / 綿布、羊毛、毛糸、絹

Batik and needle punch on cotton, wool and silk

200 × 250 cm

のではないかと考えた。つまり、これらの儀礼は死者を逆に生命の出現、宇宙が作られた天地開闢を表す状態、産まれた瞬間、胎児や母胎への回帰を表現する事が大切である。

4. 修了作品制作

修了制作では、現代日本人においてもはや伝統的ないかなる加入儀礼がない状況でどう人生の中で悲しみや苦悩、危機を抱えて生きていくのかを考えた時、布を織る事や、染める事、刺繍を施す事は社会との整合性を測るために重要な時間であり、自己変革の手段として有意義であると考え、鑑賞者へ作品として提示したいと思った。それが《始まり》を作るきっかけになった。作品を制作するにあたって、スンバ島のヒンギから霊船や生命樹のイメージを取り入れた。これらのモチーフは、母に向けての再生への願いと、自分自身も今の状態から産まれ変わりたいという欲求を込めて制作した。大いなる人生の船出である。

参考文献

1. 渡辺万知子：染色列島インドネシア、株式会社めこん、pp.118-119、2001年
2. 田口理恵：ものづくりの人類学：インドネシア・スンバ島の布織る村の生活誌、風響社、pp.137-139、2002年
3. 山口昌男：文化と両義性、岩波現代新書、p.113、2000年
4. M・エリアーデ：生と再生、東京大学出版、p.266、1971年

山田 淳美

YAMADA, Atsumi

地域の独自性に根ざしたインテリアテキスタイルの研究

Study on interior textiles rooted in regional identity

研究概要

本研究では、日本の美意識や装飾性を追求したインテリアテキスタイルの提案をした。日本の風土に即したデザインを個人的なものとして捉え直し、生活用品という形に表すための制作を行うことにより、ものづくりの立場から社会の捉えかたを模索すると同時に、ものが暮らしという空間に置かれ、使用されることで人にどのように影響を与えるかについても推察していきたいと考えた。

日本の文化における装飾の考え方と工芸における装飾性の意義を研究対象として、文献調査とフィールドワーク、作品制作を行った。文献調査ではまず、日本の装飾に対する考え方の特徴とその移り変わり、工芸品における装飾性の意義について考察した。具体的な装飾文様のひとつとして縞を挙げ、その特徴を考察した。次に、日本の住空間の特徴やその変化について調査し、インテリアデザインが暮らしを通してひとに与える影響について考察した。フィールドワークでは、日本で伝統的に活用されてきた繊維素材である葛と苧麻の歴史やその性質について理解を深め、地場産業の現状を把握した。また繊維採取や糸づくりの方法を学び製作技術を習得した。文献調査とフィールドワークを踏まえうえで、現代の日本の住まいのためのインテリアテキスタイルを素材や機能、装飾性の観点から考察し、創出した。

作品概要

間仕切り4点の制作を行った。暮らしに取り入れることで日本の風土や文化の気質を自然と感じとれるようなデザインを目指すことを念頭に制作した。これらの作品は春夏秋冬をテーマとし、室内空間の変化に乏しい現代の暮らしに、日本の文化の基準となる自然観を縞をモチーフとして取り入れた。また立体的な構造や模様の配置により布の透け感に変化を持たせ、間仕切り越しのひとの気配を心地よく感じられるよう工夫した。それぞれの縞を構成する模様や構造に「見立て」により意味が与えられるようにした。素材には、自然素材の持つ力強く土地にあった風合いを活かし、日本で古来より織物材料として用いられている葛と苧麻を使用した。技法としては、文様をつくりだすことへの欲求が直接的に表れると感じられ

ることから紋織と縫取織を装飾的な表現に活用した。葛の持つ独特な存在感を効果的に活かすため、紋織と縫取織の浮き部分に現れるように使用して際立たせた。染色は植物染料を用い、それぞれの季節の空気を感じとれるような配色とした。また経糸に用いた絹糸は必要に応じてセリシン定着加工を施し、立体性を保つための張り感を強調させた。

春をテーマとした《Moving Stripes 花》は部分的に二重織の構造を呈し、縞を構造と模様の両方により形成したことが特徴である。花が散り積もる様を紋織と縫取織で表現し、積もる花を経縞に見立てた。春が象徴する柔らかさや希望、あたたかみを都会で忙しく生きる人々の生活の空間にも持ち込めることができるような配色とした。《Moving Stripes 光》は、夏をテーマとして制作した。平面的な構造ではあるが模様によって視覚的な立体感を表している。この作品は、伊予簾綴子と呼ばれる名物裂のひとつから着想を得たものである。経縞の地模様に対し緯縞によるモチーフを立体的に感じられる配色をもって配置し、夏日を遮るシェードと見立てた。夏の華やかさと光の強さを感じられるような色づかいとした。秋をテーマとして制作した《Moving Stripes 実》は、縞自体が立体性を持って布の外へと動き出すような構造となっている。その構造上の経縞には紋織による秋の実をイメージした模様も配置されており、その模様が穏やかな緯縞を描くことで全体の印象が和らぐようにした。模様が布の外まで流れ出すような感覚を目指した。秋の自然の色の豊かさを感じとれるような配色としている。冬をテーマとした《Moving Stripes 雪》は、春をテーマとした作品と構造を同じくしている。春の作品で散りゆく花として表現されていた部分を全面的に配置することで、花を雪のちらつきに見立てている。遠目には模様が雪のように見えても、近づくとそのひとつひとつが花であることが分かり、春の到来を予兆させるデザインとなるようにした。この作品は全体的に縞としての印象は薄いですが、縞から派生し縞の構造を内包したデザインであるといえる。冬独特の緊張感や硬さ、清々しさが表れるような色づかいとした。



左 : Moving stripes 花
右上 : Moving stripes 実
右下 : Moving stripes 光



Moving Stripes 花 / 光 / 実 / 雪 / Moving Stripe flowers, lights, fruit and snow
絹、葛、苧麻 / Silk, kudzu and Ramie
180 × 85 cm